

幼稚園の對象

倉 橋 惣 三

幼稚園の保育對象は言ふまでもなく幼児である。即ち幼稚園はその在園幼児の園内生徒に對して第一の任務をもつて居るものである。そこでなし得る最善の教育效果こそ幼稚園の任務である。この意味に於て、小學校教育及びその他の學校教育が、兒童生徒を對象としてその任務を持つて居るのと同じきが如くに見ゆる。併し、兒童生徒の場合に幼児の場合とは、それが家庭との關係に於て異つて居るところがある。兒童生徒の場合に於ては、もつより家庭の子であるが、學校兒童として又學校生徒として、家庭とは切り離されたる別個の教育對象として取扱はるゝところがある。言ひ換へれば、兒童生徒に對しては、家庭は家庭でその任務を盡し、學校は學校でその任務を盡し、それが相待ち相助け合つて効果を擧げてゆくこと云ふ關係になる。更に言ひ換へれば、學校は學校の領域に於てその任務を盡すのであつて、必ずしも家庭を含めてその對象として居ることはない。これに對して、幼児の場合は少しく異なるが見られる。即ち、幼児は、兒童生徒の如く家庭から切り離されて教育對象となることが難い。おかしな言ひ方であるが、蝸牛が常に家を背に負ふて居るのと同じく、幼児は、如何なる場合に於ても家を離れたる單獨の對象として教育の前に來ることがない。蝸牛の場合に於ては、小さき家になふこと云ふ意味に例へられるが、幼児の場合には、家から抜けきらないこと云ふ意味に於てこのたごへが用ひられる。そこで、幼稚園の保育對象は幼児であることはもつよりであるが、その幼児は、さつちまでも家といつしよに幼稚園の對象になつて居るのである。

幼稚園令第一條は、幼稚園の目的を示して、その幼児そのものに及ぼす實質效果として、心身の健全なる發達及び善良なる性情の涵養を擧ぐることに、家庭教育を補ふこと云ふ意味の社會機能を要求して居る。この句の意味はもつより、

いろにまられ得るのであつて、幼児を家庭から引き抜き來つて家庭教育を補ふ云ふ意味も必ずしも全く成立し得ないものではない。云ひかへれば、幼児を幼児としてよく保育することによつて、その結果が自ら家庭教育の補助になつていく云ふはたつき方である。更に言葉を加へて見れば、分擔的に家庭教育を補ふ云ふ意味である。こういう解釋も必ずしも幼稚園の任務を解し誤つて居る云ふものではない。しかし、幼稚園令に於けるこの句の意味は、もう少し深い云ふか、少くも周到なる意味を持つものと思ふ。即ち家庭ぐるみを對象とする云ふ、幼稚園独自の職能である。平に言へば、一人の子を入園せしむることは、その家のその子だけを抜き預ることではない。直ぐにその家庭そのものを對象としてもつのである。勿論、だから云つて、家庭全體を絶えず幼稚園に招致するのでもなく、家庭全體に幼稚園の教育作用を造らうとするでもない。しかしながら、前に述べたる如く、幼児は家庭から離れて考へることの出来ないものである。したがつて、その家庭に働らきかけるころなくして、幼児だけを保育する云ふことは出来難いことである。あまりにも生々し過ぎるたさへ方のやうであるが、蝸牛を殻から抜いて育てることが出来ないのにも似て居やうか。

○ 學校教育の場合に於ても、家庭との教育的聯絡は極めて大切せられる。しかも、この場合に於ては、多くは學校を中心として家庭の聯絡を求めるのである。家庭を我に聯絡せしめることなく又家庭が來り聯絡することなくしてその教育は完全に行はれないとする、或はむしろ圓滑に行はれないとする。之に對して幼稚園の場合は異なる。その子の教育の爲めに、幼稚園を主として、家庭に要求することも實際にはあつていゝであらうが、本質的には、幼稚園がその家庭に聯絡すべきである。家庭の爲めの幼稚園であるを考ふべきであらう。

かくの如き關係は、所謂社會的保育事業の場合に於て、現にその通りに行はれて居る。託兒所に於ては家庭を助けやうとこそすれ、家庭に要求することは出来ない。家庭に適合する如くその保育の計畫を樹て又は運用してゆく。たゞその場合、家庭そのものを、されだけその實質に於て補はふとして居るか、今日の託兒所に於て、遺憾ながら多くの實現を大なる期待を持ち得ないやうではあるが、少くも生活の形式に於ては、託兒所はその家庭に赴かうとし、少くも家庭を託兒

所に從屬せしめやうとしては居ない。

幼稚園の場合、生活の形式に於て特に家庭の方に順應してゆかねばならんことを云ふやうな場合のないのを常とする。しかも、家庭教育の内容に至つては、幼稚園は家庭の中に入り込んでいつて、家庭そのものを指導してその子の家庭教育を向上充實することによつて、その子への幼稚園の任務を眞に果し得ることを云ふ關係に立つべきものである。その意味に於て、やりよりの仕方は異つて居るにしても、幼稚園は託兒所と等しく家庭のものであるべきである。即ち、家庭教育を補ふことは、分擔的に補助効果を擧げることを云ふに止らず、もつと統轄的關係に於てその實が擧げられなければならぬと解し度い。而してこの點に於て、今日の幼稚園は甚だしく少しのことで成し得て居ないのであるまいか。或は多數幼稚園はそう云ふことを思ひだもしないのであるまいか、少しく大きな言ひ方をするやうであるが、幼稚園は日本の子をも預り保育するだけでなく、日本の家庭を対象とすることを云ふまでに、もつと大望を抱いていゝのであるまいか。

以上のことは、何も幼稚園の任務に關する理想論ではない。現にアメリカに於けるナーセリースクールの活動が之を行ふて居るのである。ナーセリースクールがイギリスに創設せられた時から、家庭を云ふことはその重要な對象の中におかれてあつた。併し、未だ、働く母の教育的缺陷を分擔的に補はふことに重きをおかれてあつた。之は社會事業的にその發生を持つて居るイギリスのナーセリースクールとして、當然のことであつたとも言へる。それがアメリカに傳へられて、一方に於てはイギリスのまゝのナーセリースクールも普及したが、更に、母親教育機關としての任務を主とするもの、少くもその點を缺いではならぬとするものが發展し來つた。之、所謂アメリカンナーセリースクールである。そのナーセリースクールに於ては、保育が行はれて居る場面としては、もつとより幼児が對象となつて居つて、舊來の幼稚園と變らない。併し、母親を離れて幼児を保育するだけをもつて、決してその任務を了せりしない。幼児を保育してゐることを自體が母親の教育として効果を擧ぐることを目標として居る。況んや、保育のさうした場面以外に於て、母親を直接の對象とするところの活動は綿密に行はれるのである。敢へて綿密を云ふのは、盛に行はれて居るさか、大規模に行はれて

居るさか云ふの違つた趣を言ひ度いのであつて、普通の母親教育としての諸社會教育施設は違つて居る。茲では、さ
こまでもそこに在園する幼兒の家庭の母の教育である。従つて社會教育的對象として母を集めて居るのとは違ふ。その方
法に於ても亦母に直接的な教育を試みるにしても、たゞ概論的なる指導ではなくして、現にその園に保育されてゐる子
もに即しての教育方法をさる。綿密さはこの細やかなる關係を云つたのである。即ち子は子で教育し、母は母で教育する
さ云ふのでなく、母子一體の教育である。その母の子として保育せられ、その子の母として教育せられ、さこまでも個々
別々に抜き出さない家ぐるみの教育である。即ちこうしたナーセリースクールの對象は、幼兒でもなく、また母でもな
く、切り離せない母子そのものであると言ひ得るのである。かくの如き仕方が如何なる効果を擧げてゆくものであらうか
は總言を要しない。その子を保育するさ云ふことに於ての効果を擧ぐるに共に、その子の最もほんさうなる教育本源を培
つて居るのであつて、その子に現はれたる効果は所謂保母直接の手柄(?)であるよりも、むしろ、間接なるもの即ち、先
づ、母へはたらいてそこから子さもへ及んでゆくさ云ふ効果になるのである。その家庭は、ナーセリースクールのおかけ
で、母を離れて子さもを良くして貰つたさ思ふのでなくして、子と共に家庭が教育されることによつて子を教育し得たさ
考へるであらう。こういう効果がほんさうの力を持つであらうことは勿論として、更に、幼稚園に居る時だけの保育効果
さ云ふだけの限られたる又おそらくやそう深くは透み通り得ない効果さは別なものを生ずる。甚だおかしなたさへである
が、植木を抜いて來て大事にしては又元に戻し、又抜いて來ては又元に戻し、さ云ふやうなことはあり得ないことである。
さこまでも、鉢ぐるみである。従來の幼稚園が、根を抜いて來たさ云ふやうのおろかな方法を採つて居たのに對し、今日
のアメリカのナーセリースクールが鉢ぐるみであるさ云ふことは、實に言ひ得るさ思ふのである。即ち分擔的補助に比べ
てきんなにか根本的なことをして居るものさ云ふべきものであらうか。

こつういふさ、これからの幼稚園は非常に新たななる施設を必要とし、新なる努力を要求せられるが如きであるけれども、
その實際を打ち明けて見れば、必ずしもさう變つた仕事が残えるわけでもない。勿論、アメリカに於てはいろ／＼周到
なる實施方法が講ぜられて居るが、要は、家庭の相談機關としての職能を充分に發揮することである。その相談を充分に

なし得る爲に、時間の關係も、母と先生とが會ひ得る關係も、從來の幼稚園よりは一層懇切なものにならなければならぬが、之は、その積りにさへなれば必ずしもそんなに面倒な事ではあるまい。たゞその相談をするに當つて、幼稚園の方からの希望と要求とを投げ出して親に注文し或は親に命令するが如き態度では、相談にならぬ。その家庭に即して、實際的にさう工夫さるべきかを話し合はなければ相談とはならぬ。同時にまた、こうした態度ばかりでなく、態度は極めて受けて迎へる態度であるとしても、その子に就て識る事ころ、その子の教育法に就て識見を持つ事ころ、之は何にしても先生の方が、専門家としての存分なる與へ手でなければならぬ。之が爲めには、幼稚園教育者は、擔任の幼児達を、全體的に如何にして訓練するか云ふやうな、幼稚園内に於ける教育活動の熟練者であるのみならず、個々の幼児に就いて、恰も醫師が一人／＼の診断に委しきが如き技術を持つものでなければならぬことになる。若しこの實力に於て、充分備はるならば、態度も、自ら求められるがまゝに與へられる態度になるであらうし、その態度に基づいて、時間と實際の作法とが行はれていくであらうし、幼稚園が眞に家を對象として活動していくことは、幼稚園教育者のこうした専門家的技術を中心とし、又第一の問題とするべきである。若し忌憚なく言ふことを許さるゝならば、今日の幼稚園教育者が、この専門家的實力を持つことによつて、幼稚園の目的を、幼児だけから家庭へ擴大し得るであらう。